

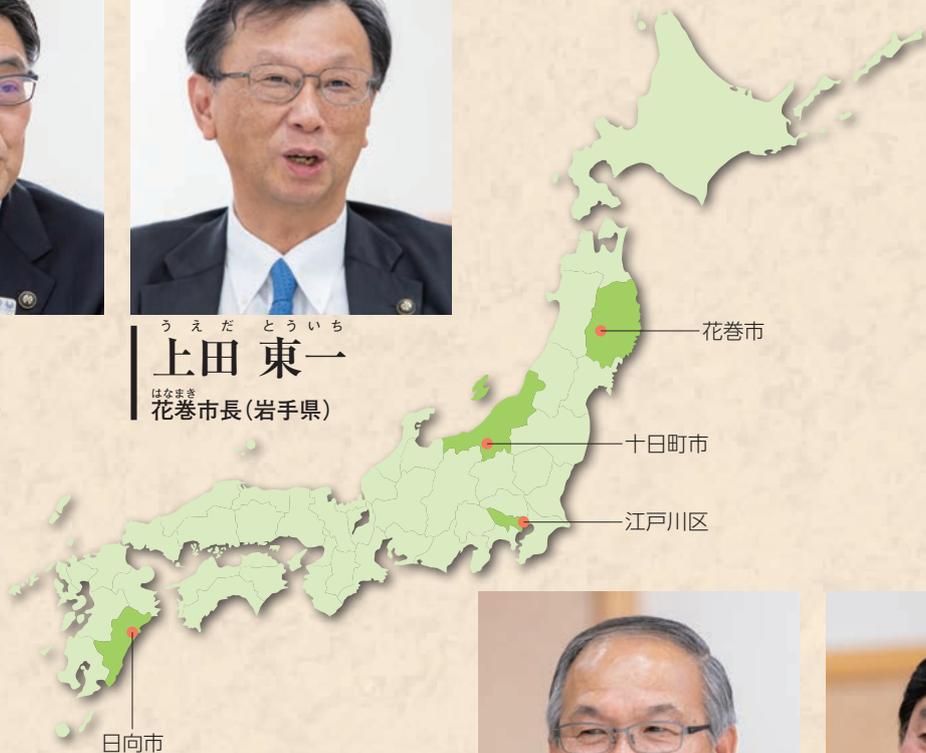
# オリパラ・ホストタウン市区長 大いに語る



せきぐち よしふみ  
**関口 芳史**  
とちまち  
十日町市長(新潟県)



うえだ とういち  
**上田 東一**  
はなびし  
花巻市長(岩手県)



日向市



とや こうへい  
**十屋 幸平**  
ひゅうが  
日向市長(宮崎県)



さいとう たけし  
**斉藤 猛**  
えどがわ  
江戸川区長(東京都)

司会・コーディネーター

ふじい さやか  
**藤井 さやか**  
筑波大学大学院准教授

日本の自治体と、2020年東京オリンピック・パラリンピックに参加する選手らがスポーツ、文化、経済などを通じて交流する、オリパラ・ホストタウン事業。令和元年10月末時点で、登録件数は365件に及んでいます。また、東日本大震災の被災自治体が支援国・地域の大会出場選手らと交流する「復興『ありがとう』ホストタウン」、障害のある海外の選手(パラリンピアン)との交流をきっかけに、ユニバーサルデザインのまちづくりなどに取り組む「共生社会ホストタウン」の登録も進んでいます。

座談会では上田・花巻市長、関口・十日町市長、斉藤・江戸川区長、十屋・日向市長にご出席いただき、各種ホストタウンに登録されるまでの経緯、これまでの具体的な取り組みやその効果、ホストタウンとして残したいレガシーなどについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



子どもたちの将来のためにも  
国際交流は欠かせません。  
外国人と交流を重ねることで、  
将来の可能性が広がります。

上田 東一  
花巻市長(岩手県)

### 登録の経緯と具体的な取り組み

**藤井** 先日行われたラグビーワールドカップでは、それぞれのキャンプ地や開催地で、各国代表チームが住民と交流した様子が報道されましたが、2020年東京オリンピック・パラリンピックでも、自治体と大会参加国・地域との相互交流が、各種「ホストタウン事業」として活発に行われます。それでは、まずは各都市の取り

組みについてお聞かせいただきたいと思えます。

**上田** 東日本大震災では、地震発生後の巨大津波により、岩手県沿岸の市町村は甚大な被害を受けました。内陸に位置する花巻市は、震災直後から市内の宿泊施設を中心に、避難者の受け入れを行うなど、被災地支援に努めてきました。こうした支援活動を行うに当たって、大きな力となったのが、海外からのご支援でした。米国のホストスプリングス市およびラットランド市、さらにはオーストリア共和国のベルンドルフ市から、多額の支援金や励ましのメッセージなどを頂きました。いずれも姉妹都市、友好都市として長年交流してきた都市です。このようなご支援に対し、改めて感謝の意を表するとともに、引き続き友好関係を深めていきたい。そのような思いから花巻市は、米国、オーストリアを相手国として、「復興『ありがとう』ホストタウン」の申請を行いました。

登録後は、元ニューヨーク・ヤンキースおよび楽天イーグルス投手ダレル・ラズナー氏による市内の小学生を対象とした野球教室、ホストスプリングス・ラットランド両市民との相互交流や被災地での復興視察ツアー、オーストリア代表柔道選手との交流会など、さまざまな交流事業を行ってきました。さらに、今年（令和元年）の9月に米国ロサンゼルスで開催された「復興ありがとうホストタウン」イベントには私も市内の高校生とともに参加し、事業の概要などについて説明してまいりました。

**関口** 十日町市は平成28年1月、クロアチア共和国を相手国としたホストタウンに登録されました。十日町市とクロアチアとの交流は長く、その始まりはクロアチア代表チームの事前キャ

ンプが市内で行われた「2002 FIFA ワールドカップ」の時点までさかのぼります。以後、同キャンプで使われたグラウンド「クロアチアピッチ」を会場に、「クロアチアカップサッカーフェスティバル」を毎年開催してきたほか、平成24年にはその隣接地に、駐日クロアチア大使からデザインが無償提供を受けて、クラブハウスも建設しました。また、歴代クロアチア大使とも親しくお付き合いさせていただき、交流を深めてきました。

そうした中で、平成25年9月に2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しました。まだホストタウンが制度化されていない時期でしたが、この時点でいち早くクロアチア代表チームの事前キャンプの招へいを決意した私は、平成27年11月に同国オリンピック委



事業の一環として「米国文化交流イベント『USAを応援しよう!』」を実施(花巻市)

## クロアチア共和国と 交流を続けることで より大きなレガシーを築き、 グローバルな感覚を備えた 国際人を育てていきたい。



関口 芳史  
十日町市長(新潟県)

員会を初訪問するなど、誘致活動に力を尽くしました。

さらに、ホストタウン登録後の平成28年5月には「クロアチアホストタウン推進事業プロジェクトチーム」を発足させ、同年8月からクロアチア人のCIR(国際交流員)を配置。同国スポーツ庁長官との会談、オリンピック委員会の視察招へいなどを経て、平成30年11月、市内での事前キャンプ実施に関する協定締結に至りました。

**齊藤** 江戸川区では、近年、外国人住民が急増

するとともに、高齢化も進展しています。また、区内の障害者の数も約3万人に及びます。こうした状況の下、江戸川区は国籍、年齢、障害の有無にかかわらず、「誰もが安心して自分らしく暮らせる社会の形成」を目指してきました。

そのような中で、江戸川区は平成29年にオランダ王国を相手国とするホストタウンに登録後、今年(令和元年)の5月には共生社会ホストタウンの登録も受けました。本区が行うユニバーサルデザインなどの取り組みが高く評価された結果と受け止めています。

江戸川区のユニバーサルデザインには特徴があります。それは障害当事者とともに、まちづくりを行うという姿勢です。例えば、障害者団体との意見交換会を通じ、車いす利用者にとっても、視覚障害者にとっても、安全で便利な道づくりを進めています。

同時に、平成29年にはオランダの共生社会に学ぶ「Game Changer Project」もスタート。パラスポーツイベントや小学校・特別支援学校を中心に、オランダのパラアスリートらと区民との交流機会を創出してきました。これらの取り組みが先駆的であるとの評価を受けて、この10月には「先導的共生社会ホストタウン」にも認定されたところです。

**十屋** 日向市は平成29年12月には米国と、翌30年12月にはトゴ共和国とのホストタウンに登録されました。本日はトゴとのホストタウン事業を中心にご紹介したいと思います。

「アフリカの笑顔」とも称されるトゴとの交流は、平成29年7月から始まりました。日本トゴ友好協会会長の金岡保之・宮崎大学准教



クロアチア選手団の事前キャンプ(テストイベント)での一コマ(十日町市)

授の紹介で、セダミス暫定担当大使が日向市を訪れたのがきっかけです。この訪問時に私も通訳を交えて会談をしましたが、大変話が弾み、地域の伝統芸能「ひよつとこ踊り」を一緒に踊るなど、一気に距離が縮まりました。こうした人間関係を基盤に、ホストタウンの申請へと話が進み、認定を受けることができました。

トゴの人口は約788万人、GDPも53億ドルと発展途上の国です。さらにビザの発給手続きの関係で、回国から日向市に到着するまでには約1週間も要するなど、気軽に行き来できる環境ではありません。

そうした中でも、平成31年3月には事前交流として、女子陸上長距離選手や同国の音楽家などが日向市を訪れ、小学校でのダンス教室や地元のマラソン大会へ参加いただき、多くの市民

と交流を深めることができました。また、同年8月に開催されたアフリカ開発会議では、トーゴの太鼓「ジャンベ」とひよっとこ踊りを組み合わせたパフォーマンスも実施。ニヤシンベ大統領にもお会いし、今後の交流事業の推進についても、互いの意思を確認し合いました。

### スポーツを入り口に幅広い分野で交流

**藤井** どのような経緯で、ホストタウンの申請・登録に至ったのか、それぞれの都市の事情をお聞かせいただきました。次に、スポーツを軸にしながら、いかに多方面に交流を進め、事業展開を図っていらっしゃるのか。この点についてもお話しいただきたいと思います。

**関口** 文化交流も大事な柱の一つです。これまでクロアチアの映画上映、中学生を対象とした



オランダのパラスリットと区内の児童・生徒が交流(江戸川区)



パラリンピックのレガシーとして、  
お互いに違いを認め合える  
地域社会を区民とともに  
創っていききたいですね。

斉藤 猛  
江戸川区長(東京都)

「クロアチアに親しむ授業」の実施、さらには大使夫人を講師に迎えた「クロアチア家庭料理講習会」など、さまざまな事業を行ってきました。今後は東京にあるクロアチア料理店などとも連携し、クロアチア食材の輸入促進など、経済交流の面でも実績を上げたいと考えています。

**上田** 今回の復興ありがとうホストタウン事業を通して、予定しているものの一つが、「野球」

を通じた交流です。市内にある花巻東高校は、メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手や菊池雄星選手の母校としても知られる強豪校です。ロサンゼルスで行われた「復興ありがとうホストタウン」の関連イベントにも、同校野球部員に参加してもらいました。ホットスプリングス市も高校野球の強化を目指しているとのこと、花巻東高校野球部チームが現地を訪れて野球を通じた交流も計画されています。

**十屋** アフリカ諸国は国際社会の中で、これから大きく成長することが期待されています。しかし、多くの日本人にとって、アフリカ諸国はまだ縁遠い存在ではないでしょうか。

今回のトーゴとの多様な交流事業は、日向市民が欧米やアジア地域とは異なる、アフリカの文化に触れる絶好の機会になると思います。ぜひアフリカに対する理解促進につながれば、と考えています。

**斉藤** 障害者も健常者と同様に、地域の等しい構成員です。これまで以上に地域で活躍していただきたいと思っています。しかし、日ごろの接点が少ないためか、世の中には、まだ障害者を「特別な存在」と見る風潮があります。私としては、オランダとの交流、さらにはパラリンピックの大会自体を、そのような障害者に対する認識を変える契機にしていきたいと考えています。

そのためにも、まずはその前提として、パラスポーツに対する興味を区民に持ってもらうことが必要です。江戸川区では、その一つの手段として、区内にある専門学校と連携し、パラスポーツのマンガ制作を行い、広く配布する取り組みを進めています。

## トーゴ共和国との ホストタウン事業は、 日向市民がアフリカの 文化に触れる絶好の 機会になると思います。



十屋 幸平  
日向市長(宮崎県)

### 言葉の壁を乗り越える

**藤井** 相手国を受け入れ、おもてなしをする際に、最も大きなハードルとなるのは、「言語」ではないでしょうか。その点で工夫したことなどはありますか。

**上田** もちろん言葉を交わし合った方が、より意思疎通が図れるでしょう。しかし、それは必要条件ではありません。花巻市でも、市民の多くは相手国の言語を使いこなせるわけではありません。片言の英語で意思を交わし合う程度です。しかし、たとえ言葉が十分に通じなくても、

深い交流はできるんですよ。交流事業でも、市民は出会いのときには抱き合って喜び、別れになると涙を流す。とても気持ちを通じ合わせています。

**関口** 確かに公式の会合などでは、通訳が必要です。十日町市の場合には、CIR（国際交流員）として採用したクロアチア人が担当します。

しかし、市民レベルでは、皆さんそれぞれポディランゲージで意思を通わせ合っています。また、市民も「クロアチア頑張れ」など、数種類のクロアチア語をマスターして力強く応援しますし、クロアチア国歌を携帯電話の着メロに使っている市民も多いですね。そうした姿に、クロアチアの選手皆さんも感激しています。

**斉藤** 私も言葉の問題はあまり心配していません。最初の出会いの場などでは、それぞれ事前にあいさつの言葉を用意することが多いですが、お互い、人と人ですから、その後は表情や片言の英語などを駆使して、感情をうまく伝え合っています。江戸川区は20人に1人は外国人という地域ですから、普段から対応に慣れているという事情もあるかもしれません。

**十屋** トーゴの母国語はフランス語ですが、子どもたちは学校で習った英語を使って積極的に話しかけています。ちゃんと通じますよ。大人よりも勇気があって、頼もしいですね。トーゴの方々も、とても気さくでノリがよいので、すぐに親しくなれます。

### インバウンド観光との波及効果も期待

**藤井** 近年は各地で外国人観光客が急激に増えています。ホストタウン事業との波及効果も期待できるのではないのでしょうか。



市民との交流イベントにトーゴの選手・関係者が参加(日向市)

**上田** 花巻市は、北東北随一の温泉地で、市内の花巻空港には上海や台北との直行便もあり、外国人の受け入れ態勢は整っています。震災直後こそ外国人観光客の宿泊数などは激減しましたが、近年は着実に増えてきました。今回のホストタウン事業を契機に、さらに人の行き来が増えればと期待しています。

**関口** 17年間にわたるクロアチアとの交流、さらには国内で行われる国際大会の事前合宿の経験によって、代表チームを受け入れるホテルの外国人対応能力は格段に向上しました。それは市民も同じです。十日町市では、特に国際芸術祭「大地の芸術祭」を通じて、多くの外国人が訪れますので、市民のおもてなし意識や対応力は年々向上しています。これを今回の事前合宿や普段のインバウンド観光でも、しっかりと生か

していくことが重要だと思っています。

**十屋** 日向市も近年は市内の細島港にクルーズ船の寄港が増え、ヨーロッパや中国、韓国などを中心に、外国人が市内を観光する姿をよく目にするようになりました。トーゴとの交流が必ずしもインバウンド観光の推進に直結するわけではないですが、大会期間中には観戦客を含め、地域を訪れる外国人が、これまで以上に増えることも期待されます。日向市としても、しっかりとおもてなしをしたいですね。

**斉藤** 大会期間中は、区内の宿泊施設やバスなどは全て旅行会社に押さえられており、経済効果が読めないところもありますが、区民のおもてなしの機運は高まっていますし、江戸川区としても観戦客向けのイベントの実施を考えています。ただ、私としてはあえて特別なイベントを行うつもりはありません。海外からのお客さまには、これまで地域が行ってきた伝統的な祭りなど、江戸川区ならではの風物に触れていただきたいと考えています。

### 子どもたちが国際感覚を身につける契機に

**藤井** 今後の展望についてもお聞かせください。



藤井 さやか  
筑波大学大学院准教授

**十屋** 大会期間中には市民応援団によるトーゴ選手団の応援なども行いますが、大会終了後も継続的にトーゴと交流していきたいと考えています。特に、日本トーゴ友好協会が進める井戸修復プロジェクトへの参画、子どもたちへの教科書贈呈などを通して、これからのトーゴの発展に貢献していきたいと考えています。

**斉藤** 交流事業で相手国のオランダから学ぶことは多いですね。オランダのパスポート選手の皆様は、「Be creative」という言葉をしきりに使います。創造的に、という意味ですが、これはまちづくりにおいても非常に重要な視点だと思っています。また、オランダはLGBTへの考え方を含め、非常に先進的な国です。

今回のオリパラのレガシーとして、「Be creative」の精神をまちづくりに生かしながら、お互いに違いを認め合える地域社会を区民とともに創っていききたいと考えています。

**関口** 17年間にわたって続けてきた交流活動により、クロアチアとの信頼関係が構築されたことで、今回の事前キャンプの誘致も成功しました。そして、このホストタウンとしての一連の事業を通じて、より大きなレガシーを築き上げたいと考えています。その一つとして期待しているのが、子どもたちへの教育的な効果です。交流を続けることで、ぜひグローバルな感覚を備えた国際人を育てていきたいと考えています。

**上田** 私も同感です。子どもたちの将来のためにも国際交流は欠かせません。言語の習得はもちろんですが、外国人と交流を重ねることで、子どもたちの視野も、そして将来の可能性も確実に広がります。各種ホストタウン事業を通じて、その貴重な機会が、開催地の東京だけでなく、全国の都市に訪れるという点も素晴らしいですね。これを機会に、全国で国際交流が活発に推進されればと思っています。

く、全国の都市に訪れるという点も素晴らしいですね。これを機会に、全国で国際交流が活発に推進されればと思っています。

**藤井** 各市区長のお話をお聞きして、ホストタウン事業の重要性がよく分かりました。外国との交流を進めることで、住民の国際理解は深まるでしょうし、特に子どもたちにとっては、交流自体が大きな刺激になり、世界に目を開ききっかけになることと思います。私も2020年東京オリンピック・パラリンピックが、ますます楽しみになりました。各都市には、オリパラを契機に今後も活発な交流を続けるとともに、ぜひ地域にレガシーを残していただきたいと願っています。本日はありがとうございました。

(令和元年11月14日、全国都市会館にて開催)  
本コーナーは隔月掲載となります。次回は3月号に掲載予定です。

